

# 米の生産調整への対応とその地理学的考察

——黒部川扇状地の場合——

森内 美津子

## 1. 研究の目的と方法

黒部川の冷水温や、扇状地であることからくる不利な耕作条件を高い米作りへの意欲で克服し、今までに合口用水事業・流水客土事業・圃場整備事業などを実施して単位面積あたりの収穫量を伸ばしてきた北陸地方の典型的な水稲単作地帯・黒部川扇状地であるが、最近の米の生産過剰による減反政策はその波をこの地にも及ぼし、現在では一定割合の転作を余儀なくされている。この地が今まで歩んできた米作りの道のりを振り返った上で現在の水田利用再編事業にいかに関与しているのかを調べ、この対応が扇状地上でも右岸と左岸、旧扇状地上と現扇状地上でその自然環境・人文環境の違いによりいかなる相異が見られるのかを探ってみようと思った。研究方法としては、この水田再編事業への対応を達成率や作物割合などから分析し、自然・人文環境との関連を見るときにも栽培農家への戸別訪問・聞き込み、アンケート調査（対象6集落60戸）を行ない資料とした。

## 2. 研究の結果

同じ扇状地上でもこの地では扇状地右岸と左岸、旧扇状地と現扇状地では少なからず性格が違っていた。土壌は扇状地特有の砂礫層といっても河川の向きから右岸側には礫層が厚く堆積し、反面左岸側は割合黒土が広く分布した。また、旧扇状地上（台地上）には現扇状地面よりも厚く腐植土が堆積している。また、左岸側は黒部川上流の電源開発のための交通機関として早くから鉄道が開通し、黒部駅で国鉄線と乗り入れ、富山市とも結ばれていた。このため人口は増え、農業人口も増大、戦前には篤農家も多く左岸側は農業においても割合に先進的な地であった。だが、戦後は一戸当たりの農業経営規模も大幅に縮小、農業ではもはや今後生活の安定を見出し難く思った左岸・黒部市は一早く工場誘致に力を入れ、世界に誇るY. K.

K. などの導入に成功、現在では富山県第三位の工業都市となっている。反面、入善町は不利な耕作条件を高い営農意欲で克服して、今でも一戸当たりの経営規模は左岸側に比べて大きく、米作りに燃え、減反政策下でも米の反当たり収量を高めようと努力している。

このような背景が転作対応にも現われ、あくまで米作りをめざす入善町では転作達成率は100%ギリギリに抑えているが、黒部市では120%前後と高かった。また経営規模の大きな農家の多い前者では、転作作物として特定作物の飼料作物や麦類を集団化して大規模に効率よく栽培したのに対し、経営規模の全体的に小さい後者では、転作率が低かった事業初期には自家菜園の面積拡大などで対応する農家が多かったし、転作率の上昇後には機械化の可能な麦類の栽培面積が増えた。が、やはりまだ団地化栽培のできない規模の小さい集落などは一般作物の中の野菜など奨励金の少ない、効率の悪い対応となっている。

このような転作対応が、それぞれの地域の帯びている性格—黒部市の工業的色彩・入善町の農業的色彩の強さ—から来るものであり、その性格が、ひいてはそれぞれの地の自然条件、つまり黒部川の流路方向による兩岸の土壌性質の差から来るのではないかと考えられることは非常に興味深いことであった。

しかし、北陸・水稲単作地帯の黒部川扇状地全体として転作傾向をとらえてみると、雪に閉ざされる冬の存在と巨大消費地が近くに存在しないという性格上どうしても収入が安定し省力化の可能な米作りと兼業という形態にならざるを得ず、転作としても商品作物の導入は難しく、特定作物の「麦」の集団栽培により最低限の転作をなるべく効率よくこなそうという姿勢を強く感じざるを得なかった。